巻頭言

常に新しい芽を

宮本健郎*

巻頭言を書くことを編集委員の方から依頼されたとき，正直いってとまどいました．私は，昭和38年頃まで光学設計，光学的伝達関数による光学像の評価，境界回折波等の研究をしておりましたが，その後研究分野が融合・プラズマ物理のほうに移ってしまったからです．しかし，プラズマの計測にはマイクロ波から硬X線領域までのすべての波長領域で準光学的方法が用いられておりますし，光学の研究発展には興味をもって目をとおしておりました．ホログラフィー，フーリエ分光，微小光学デバイス，光子検出器，レーザーの応用等々．

さて，どの分野でも言えることと思いますが，核融合・プラズマ物理の分野でも，新しい研究課題が次々と登場してきて，それまでの研究成果が常識化し，あるいは取捨選択されて変化しています．大まかに言って，ある研究課題が生産的で興味深い期間は長くても5年くらいでしょう．したがって，いつも新しい研究課題の芽を内包していないと，やがて行きづまってしまいます．その時はとうてい育ちそうもない夢のようなことと思われていたことが，他分野の進展によっていつか可能になることもあるのです．ある芽が成長できる可能性は小さいのが普通ですから，いくつかの芽を育て用意しておくことが必要でしょう．いいかえれば，現在どのような芽をどれだけ内包しているのか，若い研究者をいかに引き付けることができるのかが，数年あるいは10年先の姿を決めるのでないでしょうか．

* 東京大学理学部物理学教室　〒113 東京都文京区本郷 7-3-1